

児童を守る問われる備え

東日本大震災から8年余り、宮城県の石巻市立大川小学校では津波で児童ら84人が犠牲になり、学校管理下で起きた惨事の一つとされる。直前に迎えに来た母親と車で帰り、助かった当時6年生の女性(20)が学校で何が起きたのか、語った。教育現場の防災のあり方が今も問われている。

▼3面▶続く試行錯誤、20面▶特撮



大川小の旧校舎は、震災から8年が過ぎても訪れる人が絶えない。宮城県石巻市釜谷

大川小 当時の6年生証言 「裏山へ」同級生は訴えていた



カタカタカタ。3月11日午後2時46分、2階の教室で降り支度をしていた。机が小刻みに揺れ出した。「地震だね」。隣の列の子と話した次の瞬間、激しい揺れが襲った。慌てて机の下にもぐった。ガラスが割れるような



音。オルガンが倒れ、棚の本が全部落ちてきた。悲鳴が上がった。3分くらい経っただろうか、いつもの訓練と同じように校庭へ移動した。

学年ごとに整列した。曇り空にサイレンが鳴り響いた。「大津波警報が発令されました。海岸付近や河川の堤防などに絶対に近づかないでください」。防災無線が繰り返した。

朝礼台の辺りで教頭ら数人が話し合いを始めた。余震が校庭を揺らし、「わー!」とよめき上がる。「地面が割れたらどうしよう。」「津波が来る。早く帰りたい」。男の子たちがささやき合った。

「裏山に逃げた方がいいい」。クラスの男の子が担任に掛け合った。「今、話をしているから」。取り合わなかった。午後3時ごろ、女性の母親が迎えに来た。「ラジオで警報が流れています。早く山に逃げてと言っています」と担任をせかした。「お母さん、落

ち着いて。」「でもね、先生」「大丈夫です」。母親はあきらめて女性を車に乗せ、避難した。

後から聞いた話では、同級生たちはそれから20分以上、校庭にとどまった。午後3時半過ぎ、教頭は川近くの小高い「三角地帯」へ向かうことを決断したが、途中で津波に襲われ、84人が

校外の被災も想定を

学校外で地震や津波に遭うケースも想定しなければならぬ。

香川大学の北林雅洋教授らが2013、14年、東日本大震災で被災した岩手、宮城両県沿岸の小中学校66校を調べたところ、199人が死亡、少なくとも40人が下校後など学校の管理外で犠牲になり、66人が保護者への引き渡し後に亡くなっていた。留守番中や子どもだけで遊んでいる時などの被災に備え、生き延びる知恵や知識を身につける必要

要がある。

防災教育に携わってきた工学部大学の村上正博教授は「いざという時の行動につなげるには、学校任せにせず、家庭でも防災について話し合う環境づくりが大切だ」と話す。(桑原裕彦)

地震や津波、台風など多くの災害と向き合う日本列島。課題や対策を考える企画「災害大国」は今年度、「いのちを守る」をテーマに報じていきます。

が帰らぬ人となった。大川小の危機管理マニュアルは校庭の次の避難先を「近隣の空き地・公園等」としか決めていなかった。「避難訓練は校庭に出て終わらせた」と女性は振り返る。

震災後、「大川小の教頭」は合言葉のようにになり、学校の安全対策は進んでいる。だが女性の記憶に残るのは、対応を決められず迷った先生の姿だ。津波が来るかもしれないという想像力と早い判断。先の先まで避難場所を決めておく備えが大川小にあったら。今、そう思う。